

伝統か改革か 紙面レイアウトを問う

■新編集講座 ウェブ版 第104号 2018/7/15

毎日新聞社 技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長） 三宅 直人

ニュースの価値判断や見出し考案力とともに新聞編集者に求められる資質に、紙面の割り付け（レイアウト）能力があります。記事や写真類の分量を頭に入れつつ、メリハリの利いた紙面を作り上げるには、優れた造形感覚が求められます。近年は、従来の「箱根細工」のような複雑な組み方から、四角を基本にしたシンプルな形へと変わってきています。新聞紙面の特徴をお伝えするシリーズ6回目。今回はレイアウトです。

■ 突発に便利な「箱根細工」

私が大阪本社で編集制作センター室長（紙面編集部門の責任者）をしていた時代、新聞の1面という、見出しの大きさが不ぞろいだったり、記事の流れ方が複雑だったりするのが普通でした＝右図①。たとえば赤線で囲った記事は、「変形14角形」と呼べばいいのか、非常に複雑で、読みにくいという、切り抜きにも不便でした。

なぜこんな形が多かったのか。一つには、限られたスペースに、長短さまざまな記事を収容する必要性がありました。同時に、突発ニュースがあった時の対応が容易だった事情も見逃せません。

先日、東海道新幹線通り魔のような事件が締め切り直前に発生しました——。①「新幹線に通り魔、けが人多数か」という大きな見出しと数行の速報を突っ込む②それまで入っていた政局記事をベタ（1段）見出しにする③政局原稿は末尾からどんどん削る（前回の「神は細部に宿る 削りの基本」参照）。すぐ紙面が変わりました＝右図②。

■ 「作り手本位」から「受け手本位」へ

私は大阪編集制作センター室長時代、近畿大学でマスコミ志望の学生さん向けの講座を担当＝右図③。質疑応答で「新聞は、どこから読んだらいいか分からない」という声を聞き、衝撃を受けました。

試しに、整然とした組み方の「毎日 RT」（首都圏向け小型版新聞、現在は廃止）＝右図④＝を見てもらおうと、「読みやすい」と好評でした。こうしたレイアウトは、従来も文化面や生活面で用いられていましたが、1面など生ニュースを扱う面では、前記の使い勝手の悪さに加え、「勢い」を欠く印象もあり、あまり使われていませんでした。

でも読まれない新聞は存在価値がありません。同じような思いを抱く編集者が多いとみえ、最近はニュース面でも、読者が読みやすいよう、四角形のレイアウトが増えてきています＝右図⑤。紙面制作も「作り手本位」から「受け手本位」へ変わっているのです。



■ 時流への異議申し立て

「箱根細工」から四角形へ。それで完結するなら簡単ですが、時代の流れに真っ向から反論する人のいるのが、面白く、難しい点です。

やはり私が大阪本社在勤時代、東京新聞の「新聞を読んで」という欄に「紙面レイアウトを問う」という記事が掲載されました＝右図⑥。筆者は小俣一平・東京都市大学教授。元 NHK 記者で大の新聞ファンとのこと。氏は、伝統的レイアウトへの熱い支持を表明したのです。

この種の新聞論は、記事内容を論評するのが主流で、批判にさらされるのは、主に記者です。編集者が対象になるのが少なく、仮にそうであっても、価値判断（扱いの大小）や見出しの巧拙への言及がほとんど。レイアウトを正面から論じるのは非常に珍しいことだと思います。

■ 「2分割」や「腹切り」を批判

小俣氏の記事は、「このところずっと気になっているのが、紙面の割り付け方である」と明言。連載記事「犠牲の灯り」について、「1面をほぼ真ん中から二等分して左右に分けた紙面作りをしている」「紙面上、読みづらかった」と正面から批判しています。

問題の紙面は、2行幅の太いケイ線が紙面の最上段から最下段まで一直線に走り、紙面が分断された印象を与えます＝右図⑦。新年企画だから「去年（こぞ）今年貫く棒の如（ごと）きもの」（高浜虚子）を入れた——というのは冗談。編集者は読みやすさを考えたのでしょう。

小俣氏は、別の日の朝刊 1 面＝右図⑧＝も「気になった」と述べています。トップの「海渡る『坂の上の雲』」と二番手の「福島新成人」が重ね餅のような形でした。「業界用語で『腹斬（き）り』と言われる割り付け」「つまり右から左にかけてずっと一直線に連なった記事の割り付け方」です＝右図⑧の赤線部分。この「腹斬り（腹切り）」は、整然とした半面、ダイナミズムに欠ける印象があります＝右欄参照。

■ 「伝統派」「守旧派」宣言

このように、小俣氏の主張ははっきりしています。

紙面の2分割や腹切りなど、読みやすさ優先の手法を「新聞整理の手法にはそぐわない」と断言。テーマごとに記事や写真・図表を四角形にまとめようという「ブロック編集」を否定するのです。

逆に、「長方形の紙面の中で、読者を飽きさせないダイナミズム」や「右から左斜め下に写真や図を織り込み読者の視覚に訴えることで動感を持たせる整理手法」など、「長い年月をかけて見つけ出された経験則」を重視します。つまり、「いかにも新聞」という感じの、伝統的レイアウトへの回帰を求めているのです。改革や新しさが好まれる風潮の中、すがすがしいまでの伝統派・守旧派宣言です。

「目先を変えた紙面いじりは、いずれ飽きられてしまう」「奇をてらう整理手法は、角を矯めて牛を殺すことになりはしないだろうか」という小俣氏の主張に、私はひたすら考え込んだのでした。



■ 「前衛」の朝日、「伝統」の読売

小俣氏は記事の中で「腹斬り」について、「全国紙の中にも、四、五年前から同様の試みをしているところを見受ける」とも書いています。具体名には言及していませんが、明らかにこれは朝日を当てこすっています。

例えば朝日（東京版）13年1月13日朝刊＝上図＝は、記事部が4ブロックに分割され、「マクド難民（※）」の下段は、きれいな腹切りです。その下は「北朝鮮」と「津波」が同じ4段見出しで並びますが、これも編集の伝統では「禁じ手」とされてきました。新しい試みを多用した前衛の紙面です。ただし単調で平板。見ばえしないのも事実です。

※ 東京紙面なのに「マク」でなく「マクド」なのは、大阪のルポだからでしょう。

同日の読売（東京版）朝刊＝下図＝を見ると、昔ながらというか、見出しがデコボコに並ぶ、伝統的な紙面作りを守っていました。

